

## 2021年8月15日聖霊降臨後第12主日説教

箴言9章1-6節

エフェソの信徒への手紙5章15-20節

ヨハネによる福音書6章53-59節

本日は、8月15日です。先週と同じように、この時期日本では、過去の戦争の愚かさを改めて自覚し、過去の過ちを繰り返さないことを学び、改めて平和を望む時です。礼拝の中でも、教区が発行した「平和の祈り」集の中から祈ります。

20世紀は、戦争の世紀と呼ばれる通り、二つの世界大戦の他、多くの戦いが行われました。21世紀に入り、平和の世紀となるかということ、そうではありませんでした。世界各地で今も戦いが絶えません。そもそも～世紀という時間区分は、人間が定めたものですから、それが変わっても、その内容が大きく変化しないのは当然かもしれません。

平和を望むとき、過去から学ぶことが大切ですが、歴史から学ぶという意味では、慎重である必要があります。歴史は、一つの文化がその観点で記述する事柄であるからです。一つの例として、本日は、第二世界大戦が終わった日ではありません。世界・一般的には9月2日です。しかし、日本では、多くの人々が、長い戦いの終了を感じた日であることは確かです。過去を見て学ぶことにおいて、人間が作り上げる絶対的な視点は、存在しないのです。また、文化によって変化する歴史は相対的だが、事実は絶対的でありまた客観的で変わらないという判断もあります。わたしもそう思いたいのですが、それも作り上げられた観点の一つといえると思います。新たな研究や調査で、過去の事実が変わる場合もあり、意図的に過去の事実をその時代の必要に応じて変えていく、あるいは創成していく文化もあります。これらは、「平和」という多くの人々が望む事柄が、なかなか実現しない理由の一つ言えると思います。人間の知恵では、真の「平和」の定義が困難であり、その実現はさらに難しくなるからです。

論理的に矛盾してしましますが、『聖書』は、過去を振り返り、今を理解し、そして未来に向けて歩むことを求めています。ただし、それには大前提があります。その歩みを主なる神様の視点で行うということです。もちろん、先に記したように、その行為も一つの宗教の文化的な営みに過ぎません。またイデオロギーによっては、「神」という存在自体が平和を乱すと主張するかもしれません。しかし、わたしたち、主なる神様を信じるものは、この視点から学ぶこと、そしてその視点から学んだことを具体化することが重要です。そして、その学びを行う基本は礼拝と交わりです。すなわち、礼拝で聖書から学び、祈り、賛美し、聖餐の恵みにあずかることを通して、人間の知恵ではなく、主なる神様からの示される知恵を学び、教会の様々な交わりを通して具体

化するのです。

本日の旧約日課は「箴言」です。「箴言」は、「コヘレトの言葉」と並んで、知恵文学の一つです。「箴言」は、1章1節から「**イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言**」と始まり、全体がソロモンの知恵となっていますが、単に知恵を語るだけではなく、「箴言」という訳語の通り、戒めの教えの言葉も含まれています。「旧約聖書」には、律法などの法律、預言、歴史記述、黙示文学などいろいろな内容がありますが、この知恵も大切な内容の一つです。一般的には、預言と律法の後、知恵が発達したと言われていました。

本日の箇所、最初に気付く点は、「**知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた**」(箴9:1)とある通り、「**知恵**」という存在が、主語になっていることです。つまり、知恵が、擬人化されているのです。これはこの「箴言」全体、あるいは知恵文学の特徴でもあります。擬人化された知恵は、言葉と結びつき、主なる神様と同じ、あるいは天地創造の初めから主なる神様と共にある存在として尊ばれています。このことが「新約聖書」の「ヨハネによる福音書」に影響を与えることは明らかです。

その知恵が「**家を建て、七本の柱を刻んで立てた**」(箴9:1)とあるのですが、この表現は恐らく、「神殿」のようななんらかの象徴的な場所を、用意したことを意味していると思います。七つと数は、聖書ではよく用いられますが、神殿と結びつけますと、メノラーと呼ばれる七本建ての燭台が思い浮かびます。もし、「知恵」が、神殿をしるしとして用意した、と語っているのであれば、その神殿で何が行われるのはもちろん祭儀です。そして、その祭儀の内容は、「**獣を屠り、酒を調合し、食卓を整え**」(箴9:2)、また「**わたしのパンを食べ、わたしが調合した酒を飲む**」(箴9:5)とある通り食事です。

主なる神様と同じような存在である知恵が、神殿を用意し、食事の準備を行うという不思議な描写です。「旧約聖書」には、イエス様と弟子たちのように、主なる神様がイスラエルとともにいて食事をするというような描写はありません。しかし、主なる神様はイスラエルと常にともにいてくださる方であり、それは食事の時も同じです。そのように考えますと、食事の時もつねに主なる神様がともにいてくださると考えることが大切であり、もし、本当に主なる神様がともにいてくださる食事が存在するのであれば、それは人間にとって至福の時であることは確かです。

さて、それでは、そのような食事に招かれるのは誰か、それが次に示されています。それは「**浅はかな者**」と「**意志の弱い者**」です(箴9:4)。「浅はかな者」は、(考えや物事の見方などが)単純で薄い人のことですが、後半の「意志の弱い者」は、『心、精神、意思』に『欠ける人』です。その意味では「新共同訳」の「意志の弱い人」は、直訳に近いのですが、以前の「口語訳」では、それぞれ「**思慮がない**」と「**知恵がない者**」になっており、新しい「聖書協会共同訳」でも「**思慮なき者**」、「**浅はかな者**」となっています。どの訳語が適切かは判断が難しいのですが、考えや物事の見方が単純すぎて浅く、また意思や精神が弱い人で

すから、いずれにしても良い意味ではありません。しかし、食事の目的は、そのような者が、「浅はかさを捨て、命を得るために、分別の道を進むため」(箴9:6)です。この「分別の道」の「分別」も「理解、思慮、識別」などを意味する言葉であり、ここの訳は「口語訳」でも「聖書協会共同訳」でも同じです。食事に招く理由は、知識や知恵のあるものがそれをさらに増し加えるためではなく、また物事をしっかりと理解していた人が、その理解を深めるためでもなく、それらに欠けていた人が、全く方向を変えて、命を得るために分別の道を進むためです。非常に逆説的です。そして、逆に言えば、知識と知恵があり、理解が深い人は、もし、その食事に招かれないのであれば、それらを深めても、命には至らないということになります。

そして、この食事を呼び掛ける者はだれかということ、「はしためを町の高い所に遣わして呼びかけさせた」(箴9:3)とある通り、「はしため」です。本来の意味は、小さい女の子です。「口語訳」でも同じですが、この訳語は、あまり良い言葉ではありませんが、結婚前の若い女性が女主人のしもべとなることから、この訳になったのでしょう。また、単数の様に訳されていますが、原文は複数ですので、「聖書協会共同訳」では、「若い娘たち」となっています。また「高いところで呼びかける」こととは、公式の宣言をするという意味です。基本的に、女性のしもべが、公式の場で、何らかの公の宣言をするということはありません。その意味で、この表現は、アイロニーを含んだ表現といえます。

これらから分かることは、今日の旧約日課、「箴言」は、逆説やアイロニーに満ちているということです。そもそも、神殿祭儀は、人間の方が主なる神様をたたえるために準備し行うものです。ここでは、主なる神様と同じ知恵の方から、神殿と食事の準備を用意して下さっています。またその呼びかけを行う人も、通常は公の場に立つことのない小さい女の子たちです。そして、呼びかけの対象となるのも、思慮がない、知恵がない人々であるからです。

逆説と表現しましたが、本日の「箴言」が語っている事柄は、一般的な人間的理解の範囲内でも十分に把握出来る事柄です。すなわち、知識や理解を深めるとき、それが深まることに応じて傲慢になるのではなく、深めれば深めるほど、謙虚になる、あるいは謙虚にならざるを得なくなる、と言われることもあるからです。『聖書』の教えが、そのような格言的な理解にとどまらないのは、その先に、全知全能である主なる神の存在を知るようになる、という点があることです。また、知恵である主なる神様の方から、愚かなである人間を、食事に招こうとしている点です。そして命へと導こうとしている点です。

多くの人々が感じることでありと思いますが、これらの内容は、各福音書に描かれている、イエス様の教えや行いと類似しています。イエス様は、「旧約聖書」に示された主なる神様の愛を、もっともわかりやすく示して下さった方であると表現されますが、まさにこの箇所でも同じことがいえると思います。つまり、これらの箴言の内容は、イエス様の行った食事、あるいは主の晩餐、または十字架の招きと共通すると言えるのです。またパウロの手紙であるコリン

トの信徒の手紙 1 章 25 節「**神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです**」、すなわち十字架における逆説と類似することを語っているといえます。

そのように考えます時、本日の使徒書であるエフェソ書で、「**愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい**」(エフェ 5 : 15) とある点や、「**だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい**」(エフェ 5 : 17) とある点は、これらの箴言の言葉と矛盾しているのではなく、逆説が、順説に戻っていることが分かります。それはすでに、十字架での逆説を受け入れた信仰者を対象としているからです。言い換えれば、十字架の愚かさ、そこに救いがあることを受け入れたことが本当に知恵であり、また神様の愛であり、そこからすべてが始まることを知っているということが前提となっているのです。人間が、肉の欲から来る目的や目標を達成するために、どんなに知恵を学び、その知恵を働かせたとしても、それは愚かなことにほかならないのです。愚かさと敗北の象徴である十字架にこそ本当の知恵と救いがあるからです。だからこそエフェソ書は、「**むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい**」(エフェ 5 : 18-20) と、霊によって歩み、互いに言葉を掛け合い神様に感謝することを勧めています。お酒は飲んでもよいのですが「**酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです**」とあるのは面白いです。

さて、福音書の物語に触れていませんが、本日の箇所も、6 章の連続する物語の一つとして、大切なことが示されています。それは、「**人の子の肉を食べ、その血を飲む**」ことは、主なる神様がイエス様を通して示された逆説を理解して、また信じていなければ、到底受け入れられないということです。しかし、そのことをまことに信じて理解した時、その人はこの世界に生きていながら、すでに本当の命の道を歩んでいる。だからこそ、その歩みは変わる、そう語っているのだと思います。

残念ながら今も各地で戦いがあります。これからの 21 世紀も、残念ながら多くの戦いが起こるかもしれません。その戦いも、従来型のみならず、今までと全く異なる戦い方も起こるかもしれません。実際に起きているようです。新たな戦いが起こることを防ぐことが大切です。しかし、それでも、起きてしまった戦いと多くの悲しみから、人間は学ぶこともあるかもしれません。しかし、『聖書』が示す知恵、そして、十字架にかかれたイエス様は、そのようなたくさんの悲しみがなくても、平和に至る道がある、そのことを示して下さいました。そのことを、これからも心に刻み、世界に示していきたいと思います。礼拝と教会の交わりを通して、示していきたいと思います。今までも、それぞれの場所で心を合わせて祈り続けて来たと思いますが、今日も、そして、これからも主なる神様の平和の実現ために、祈り続けたいと思います。また、物理的に集まって、共に祈るひとときを、心から待ち望みたいと思います。